

# 研究紀要

## 第22号

- 方形周溝墓と周溝の覆土と出土状況Ⅱ 福田 勇  
－豊島馬場遺跡－
- 古代武藏国の鉄生産 赤熊浩一  
－箱形炉と竪形炉－
- 古代の官衙や集落と陶硯 田中広明
- 都幾川下流低地の埋没微地形と遺跡立地（予察） 菊地 真
- 富士見市内出土石製品の鉱物分析 早坂廣人 大屋道則
- 火打石小考 大屋道則
- 石器材料及び石器の理化学的分析値（2）  
大屋道則 上野真由美 新屋雅明 村端和樹 笹森健一  
国武貞克 松本美佐子 田村 隆 加藤秀之

2007

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

30 talc	18 talc	31 talc	10 talc	24 talc	15 talc	34 talc
07 talc	11 talc	09 talc	26 talc	27 talc		
12 talc	13 talc	17 talc	03 talc	33 talc clinochlore		
04 talc	05 talc	06 talc	01 talc	08 talc		
16 talc	22 talc	36 talc	29 talc	28 talc		





## 目 次

### 序

方形周溝墓と周溝の覆土と出土状況Ⅱ －豊島馬場遺跡－	福田 聖 (1)
古代武藏国の鉄生産 －箱形炉と竪形炉－	赤熊浩 (21)
古代の官衙や集落と陶硯	田中広明 (39)
都幾川下流低地の埋没微地形と遺跡立地（予察）	菊地 真 (61)
富士見市内出土石製品の鉱物分析	早坂廣人 大屋道則 (71)
火打石小考	大屋道則 (81)
石器材料及び石器の理化学的分析値（2）	(91) 大屋道則 上野真由美 新屋雅明 村端和樹 笹森健一 国武貞克 松本美佐子 田村 隆 加藤秀之

# 古代の官衙や集落と陶硯

田中広明

**要旨** 陶硯は、古代官人や僧侶などを象徴する考古学的資料のひとつである。そのため、陶硯が出土すると、役所か寺かという議論が巻き起こる。しかし、陶硯は官衙や寺院ばかりではなく、集落からも出土する。

そこで本稿では、陶硯の出土した関東地方の生産遺跡、官衙や寺院、集落遺跡について展開過程、需要量の推移、地域性の存在、嗜好と格式などの点から詳細に検討した。

その結果、①郡家建物群の登場以前から陶硯は生産され使用されていた。②郡家の登場段階に陶硯の需要が急速に高まる。しかし、③郡家や寺院からの出土は少ないので、畿内や東海地方の陶硯が出土することがある。④8世紀前葉から集落遺跡でも陶硯の出土がみられるようになり、9世紀に入ると顕著となる。そして、⑤陶硯の出土には、地域差があり、須恵器窯の操業規模や流通圏の大きさにも左右されていたなどのことが明らかとなった。

また、陶硯は、単なる文房具の一つではなく、官人や僧侶など文字にかかる人々の職掌や権威を象徴する器物としても機能していたようであり、集落遺跡からの出土は、この点も考慮する必要がある。

## はじめに

日本の古代国家は、全国の津々浦々、末端社会まで、文字による政治的・社会的支配が徹底していた。大陸や半島から伝えられた文字とともに、文字を記すための筆、墨、硯、紙もまた伝えられた。これらは「文房四宝」とよばれ、なかでも腐食しにくい硯は、その研究の歴史が長い。

ところで、硯には、石硯、瓦硯、陶硯、木硯などがあり、古代に陶硯、中世に石硯、近世に瓦硯が登場するといわれている。とくに陶硯は、これまで古代の官衙や寺院から出土することが多いこと、文字をあつかう人々は、官人や僧侶に限られることから、官衙遺跡を特定する資料としてあつかわれてきた。

しかし、集落遺跡の調査が増加し、陶硯の出土が高まると、必ずしも陶硯が出土したからといって、官人や官衙の存在を実証する材料とはいえないなくなってきた。では、なぜ集落に陶硯がもたらされたのか。地方行政の文書システムと陶硯の獲得、保有、消費

といったプロセスには、複雑な背景があったといえよう。

ここでは、その歴史的背景を探る前作業として、関東地方出土の陶硯が、どこで遺跡でいつから生産され、どのような遺跡で消費されたか、その実態を把握することを目的とした。

## 1 陶硯の生産

**陶硯生産の開始** 生産遺跡、つまり須恵器窯や工房、捨て場等から出土した陶硯は、7世紀の早い段階から愛知県猿投窯や大阪府陶邑窯などに確認できる。関東地方では、7世紀後葉から武藏国と下総国に陶硯を生産した窯がある。

しかし、7世紀後葉に遡る製品も消費遺跡から出土しており、二国以外にも未知の須恵器窯で陶硯を生産していた可能性が高い。

武藏国は、埼玉県寄居町末野窯と東京都町田市小山窯、下総国は、千葉県栄町五斗溝窯である。末野窯は、古墳時代から続く北武藏の須恵器需要を担っ

た窯である。大形壺や食器などを焼成し、後期古墳へ積極的な供給を行った。一般的な小形の円面鏡のほかに、十六脚に復元される獸脚鏡は、他に類例をみない。

静岡以東の東国では、獸脚鏡はとても珍しい。消費遺跡からの出土ならば、中央からの派遣官人が、畿内からもたらしたと考えられる。しかし、窯跡からの出土であり、そのモデルは、畿内から派遣官人がもたらした製品であったとしても、地方の工人、または発注者が、獸脚鏡を求めたからであろう。

つまり、文書事務や官人の象徴としての獸脚鏡が必要とされた場や職掌が、7世紀後葉の段階に存在したこととなる。具体的には、国家を代表する国司や総領といった行政官が、この陶鏡を用いたと考えたい。

一方、南武藏の小山窯では、中空円面鏡と筆立ての破片があり、大型の円面鏡があったかもしれない。ただし、小山窯や末野窯にても陶鏡だけではなく、多量の食器や貯蔵具とともに陶鏡は焼成された。窯跡から出土する初期の陶鏡はとても少ない（註1）。

7世紀末から8世紀初め 各地に地方行政の拠点として、詳家が建てられるようになった7世紀末から8世紀初めになると、武藏国や常陸国で陶鏡の生産がみられるようになる。武藏国は石田窯、赤沼窯、立野遺跡、常陸国は栗山窯、堀ノ内窯などである。この段階の陶鏡は、低脚で大きく「ハ」の字に広がる大形円面鏡と、坏形の小形円面鏡がある。後者は、赤沼窯、立野遺跡にみられるが継承されない。

脚部の意匠としては、石田窯の零状の透かし穴、赤沼窯の「工」字状の透かし穴がある。また、立野遺跡では、脚部に柱状のレリーフを貼り付けた痕跡がみられた。宮城県仙台市郡山遺跡、福島県原町市

泉廃寺の独鉢状レリーフを施した陶鏡と共通するデザインである。これらの特徴は、後に継承されなかった。

一方、堀ノ内窯や栗山窯の方形透かし穴と連続した縦の刻みを充填する鏡の意匠は、8世紀以降、10世紀まで継承された。これ以後、この意匠と双壁となる連子窓状の透かし穴は、この段階に登場するが、窯跡からの出土はない。

8世紀前葉 武藏国南比企窯、常陸国堀ノ内窯、同国木下葉窯、下野国益子窯、上野国秋間窯などで多数焼かれた。地域の中核となる大規模窯が各地で展開することと、陶鏡需要の高まりによって、多数生産されるようになった。

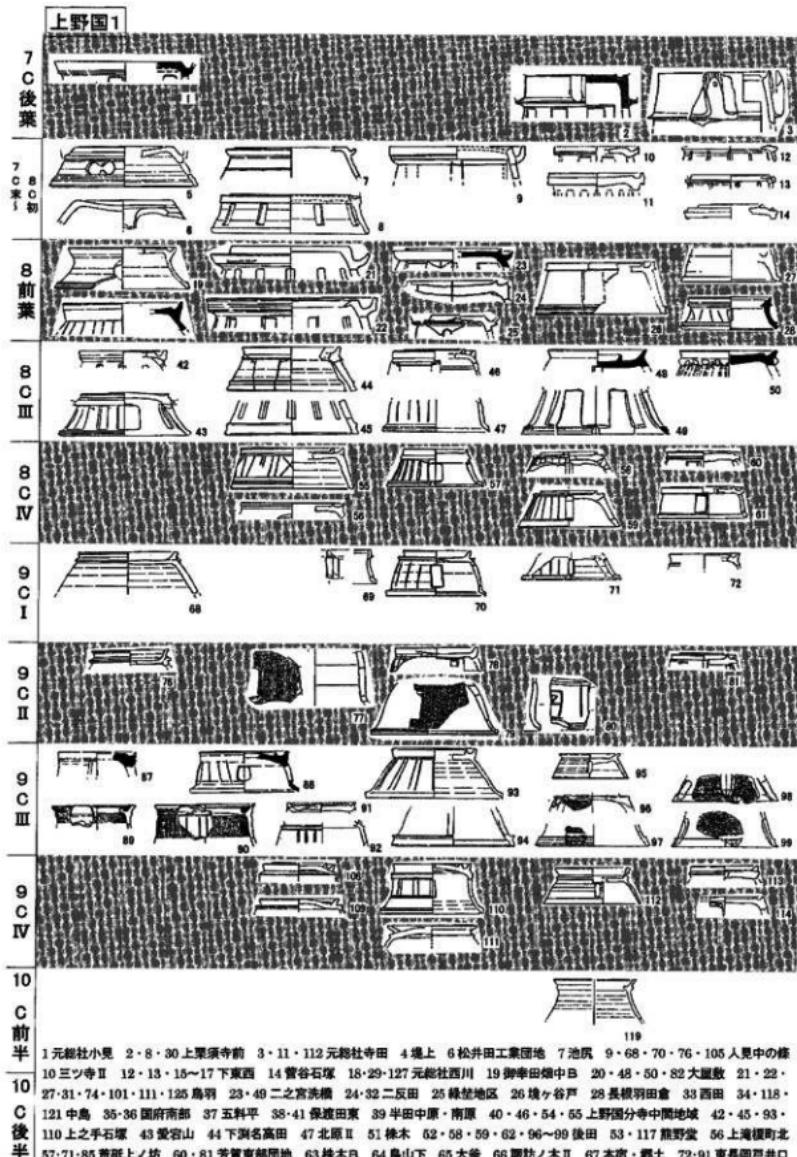
なかでも南比企窯の円面鏡は、武藏国比企・入間・多摩地域の集落や武藏国府の需要にこたえ、また、木下葉窯の円面鏡も常陸国南部の集落や常陸国府の需要にこたえて生産された。

これら大規模窯で陶鏡が生産されるピークは、8世紀第Ⅱ四半期から第Ⅲ四半期にかけてである。栃木県宇都宮市広表窯や千葉県市原市永田不入窯も前後して陶鏡を生産していた。

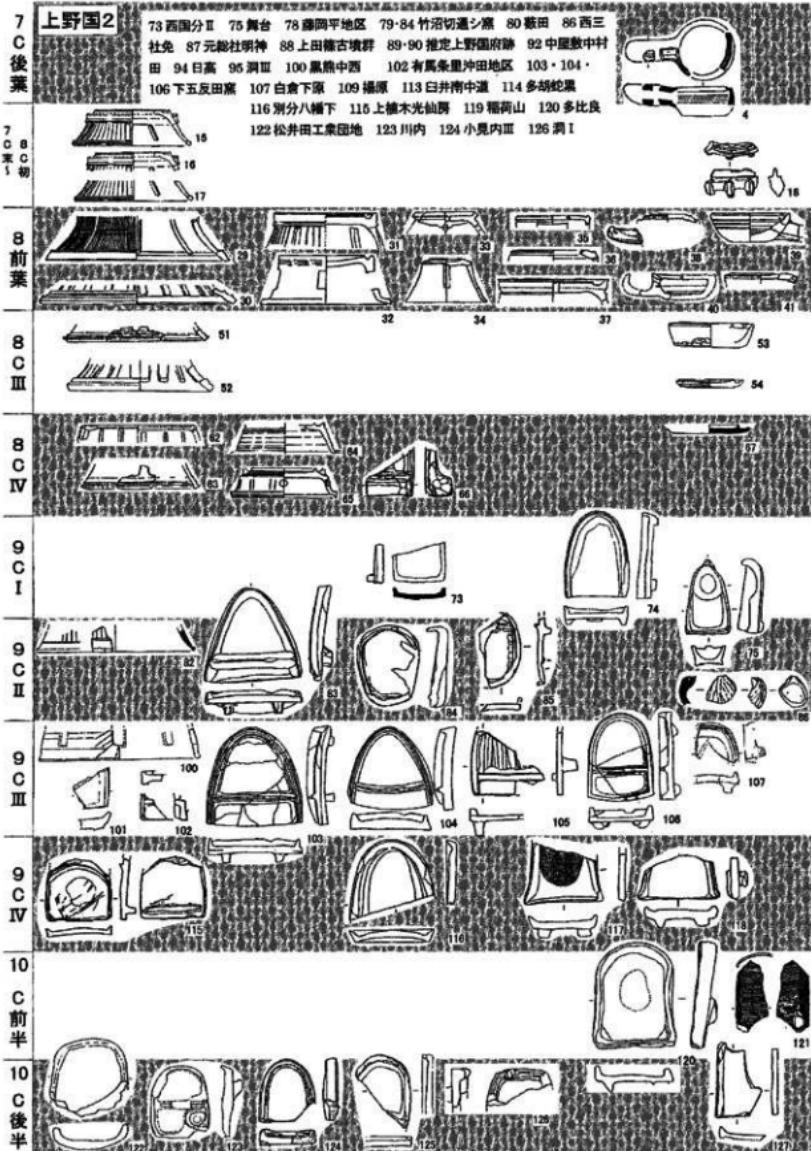
陶鏡の需要が上昇しても、陶鏡の専業窯は作られなかった。そこまで陶鏡の需要が、高まらなかったためである。陶鏡は、千点を超える食器や貯蔵具とともに、僅か数点が併焼された。

円面鏡の細部のつくりを観察すると、同一窯や同窯群から出土する壺や長頸壺の口縁部が、円面鏡の脚端部と共通することがある。また、高台付椀の高台部と陶鏡の外堤や内堤が、共通する場合がある。それは、従来、壺や壺などを生産していた工人が、発注者の求めに応じて壺の口縁を挽くように円面鏡の脚部を作り、ロクロから切り離した面を鏡面とし、天地を逆転させて円面鏡としたからである。

また、鏡面と脚部の間には、外堤、内堤、上位凸



第1図 上野国の陶器1



第2図 上野国の陶器 2

帶、下位凸帯などの装飾が付けられたが、外堤と内堤は、高台付椀や長颈壺の高台と共に須恵器工人の「無意識の行動」（くせ）を見ることができる。つまり、個々の窯群ごとに基本は踏襲されながらも、独自の意匠で円面観が作られていたのである。

ところで陶観は、東国では8世紀前葉以降、圓足観に特化され、平城宮や平城京の観と地方の観には、形による階層差が生まれることとなった。

7世紀末から多数の蹄脚観を生産し、藤原京や平城京で用いられた岐阜県美濃須衛窯の観は、美濃国内の官衙や集落で用いられず、逆に平城京では、美濃須衛窯の蹄脚観が用いられた。また、そればかりではなく、一般的な圓足観も用いられ、しかも比較的粗悪品、たとえば焼きムラや歪んだ品物も用いられていた。

つまり平城京では観の種類に需要の幅があり、地方の官衙や集落は、圓足観に限られたため、須恵器工人们はその求めに応じ、圓足観を生産したのである。

ただし、圓足観という規範があっても外堤、内堤、上位凸帯、下位凸帯といった貼付装飾や脚部の透かし、刻みなどの文様は、窯群や地域によって独自の発展をした。とくに透かしは、円形、方形、十字形、長方形、L字形など、刻みも平行線、斜格子、羊歯状などさまざまに展開し、工人のデザインセンスを發揮する機会ともなった。

ところで、相模、甲斐、安房、伊豆などでは、須恵器窯の展開が遅れるか、まったく展開せず、武藏や信濃など周辺諸国の製品を受容していた。一般的食器や壺などとともに、陶観も他国に依存したこととなる。生産手段を掌握しなかった国や郡は、文房具（陶観）まで交易によって官が、あるいは私が獲得していたのである。

おそらく、官人や僧侶の求めに応じ、窯の経営者が発注を受け、工人たちに「様」の円面観を写させたと考えたい。また、窯ごとに意匠が連続することは、工房に複数が置かれ発注に合わせて生産していたのかもしれない。

**8世紀末** 8世紀末から9世紀前半に大きな転機が訪れる。風字観の登場である。風字観は、平城宮内や長屋王家などからも出土しており、平城京では、すでに8世紀中葉ごろから使用が確認される。正倉院の御物である「青斑石莊観」（註2）も、最も古い風字観の一つである。

ところで、粘土板に脚部を付けた傾斜観は、風字観に先行して、鹿や鳥、亀などを模した形象観や円形観などが登場する。関東でも鳩山窯跡群で、陸と海との間に格狭間の堤を付けた宝珠観が、8世紀第Ⅲ四半期に生産された（註3）。

風字観が、東国各地で生産されるのは、9世紀に入つてからである。群馬県藤岡・吉井窯（9世紀第Ⅱ四半期：藤岡市竹沼切通窯、9世紀第Ⅱ四半期：吉井町下五反田窯）、東京都南多摩窯（9世紀第Ⅱ四半期）、埼玉県東金子窯（入間市谷津池窯：9世紀第Ⅱ四半期）、同県南北企窯（嵐山町将軍沢窯：9世紀第Ⅱ四半期）、千葉県南河原坂窯（9世紀第Ⅰ四半期）などである。

関東地方では、9世紀第Ⅱ四半期から風字観が、窯跡の資料としてみえる。しかし、集落遺跡ではそれ以前のから確認することができ、9世紀に入ってから各地で風字観の生産が始まったと考えたい。

その一方で、円面観も引き続き生産され、集落や国府などへもたらされた。風字観は、福島県会津若松市大戸窯や新潟県佐渡郡大泊窯などでも生産されたが、意外にもその生産量は少なく、受容された地域は限定的だった。

10世紀に入ると、陶観の生産は極端に減少し、群

馬県月夜野窯跡群（月夜野町洞遺跡）、埼玉県ふじみ野市新聞窯などに確認できるだけとなる。

## 2 宮衙の陶硯

7世紀後葉 東国の方官衙、とくに郡家に先行した評家が各地に成立するのは、7世紀末から8世紀初頭である。それ以前は、評の官人となった豪族の居宅や、各地に設けられた屯倉の管理施設、交通施設として設置された駅、あるいは館などが、評や國にかかる行政を担っていた。

少なくとも戸籍や計帳の手実作成には、筆、紙、墨、硯が必要となり、官、あるいは官人個人がそろえなければならなかった。税制や軍制などの整備を急いだ我が国の古代国家は、官衙造営に先駆けて、文書事務行政を推進させた。官衙は無くとも文書事務が執行される状況が続いたのである。そして、官衙造営までの経過措置として、豪族の居宅や集落の拠点となる施設で文書事務が行われた。その結果、陶硯が評家に先行する遺跡から発見されることとなったと考えたい。

7世紀後葉に遡る陶硯は、群馬県前橋市小見遺跡、同県同市元総社寺田遺跡、同県藤岡市上栗須寺前遺跡、同県群馬町堤上遺跡、埼玉県深谷市熊野遺跡、千葉県千葉市五十石遺跡などで確認できる。堤上遺跡と五十石遺跡からは、把手付き中空円面硯が出土しているが、前者は在地窯、後者は静岡県湖西窯の製品かもしれない。

寺田遺跡や下栗須遺跡の円面硯は、上位凸帯と外堤との間が広く、そこに筆立てが付属する。美濃須衛窯の製品に類似する大形品である。また、小見遺跡の陶硯は、型式的に8世紀第Ⅱ四半期まで継続する。秋間窯初源期の製品である。熊野遺跡では、小形の円面硯がみられる（註4）。

このように7世紀後葉の陶硯は、後に国府の置か

れた前橋市総社地区や緑塗屯倉ともかかわる藤岡市上栗須地区に集中する。その背景には、東国国司（總領）にかかる派遣官人の存在をうかがえる。彼らが、群馬県秋間窯や埼玉県末野窯、東京都南多摩窯（八王子市小山窯）などに陶硯を発注していたのかもしれない。

7世紀末から8世紀初頭 陶硯の需要が一気に上昇する。ことに評家にかかる遺跡や豪族の居宅からの出土が、圧倒的に多い。

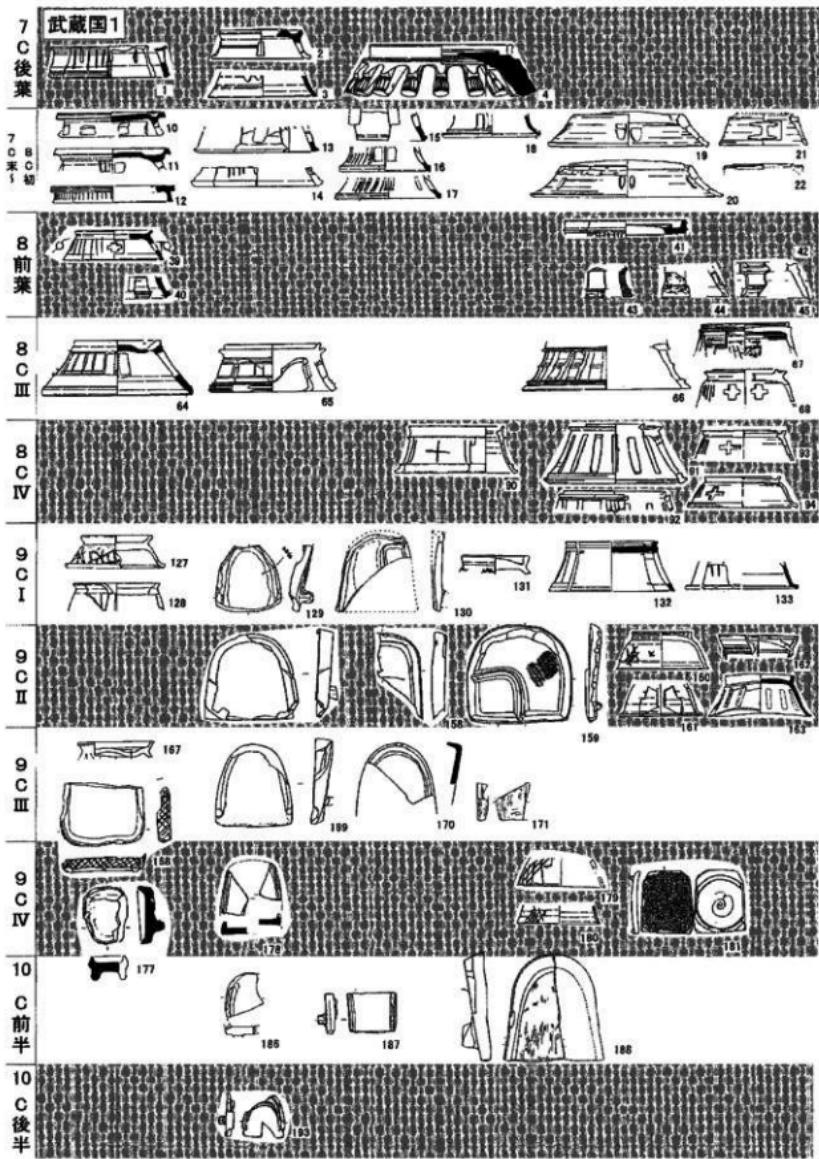
評家では、埼玉県深谷市熊野遺跡（武藏国株沢郡家）、我孫子市日秀寺遺跡（下総国相馬郡家）、千葉県栄町向台遺跡（下総国埴生郡家）、宇都宮市茂原向原遺跡（下野国河内郡家）などの遺跡から出土した。しかし、評家でも陶硯の出土は少なく、熊野遺跡を除いて1点である。

評（郡）家だから官人がいて文書行政を行い、陶硯も多数消費されたわけではなかったのである。確かに文書は多數書かれたであろうが、頻繁に使われたのは、いわゆる転用硯であった。唯一、熊野遺跡だけが、複数の陶硯を出土した。それは熊野遺跡が、実務官衙の曹司を調査対照としたからである（註5）。

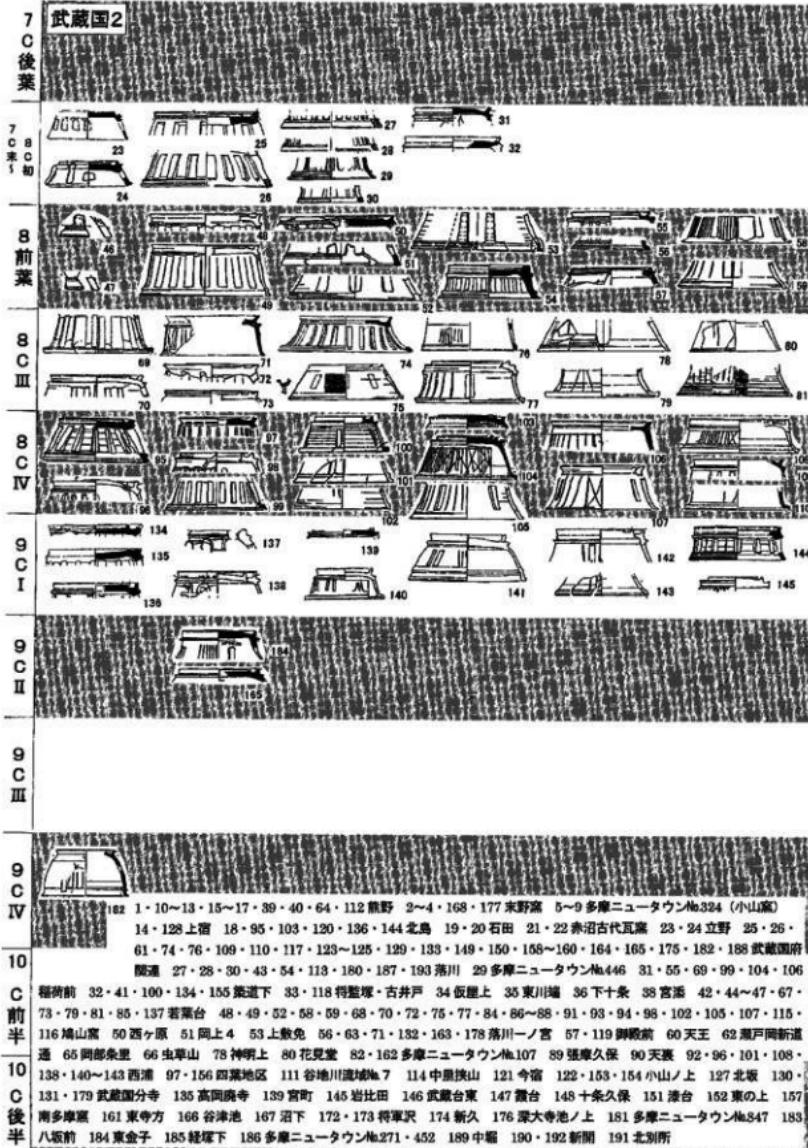
豪族の居宅や官人の宿泊、実務官衙である館にかかる遺跡からの陶硯の出土は、群馬県前橋市下東西遺跡、群馬町熊野堂遺跡、藤岡市上栗須寺前遺跡、熊谷市北島遺跡、坂戸市稻荷前遺跡、深谷市築道下遺跡、本庄市古井戸・将監塚遺跡、東京都日野市落川遺跡、栃木県宇都宮市西下谷田遺跡でみられる。圧倒的に上野国と武藏国が多い。

なかでも熊野堂遺跡や古井戸・将監塚遺跡では、把手付き中空円面硯が出土している。下東西遺跡や西下谷田遺跡など比較的短期間の遺跡は、官人にかかる館であったと考えたい。

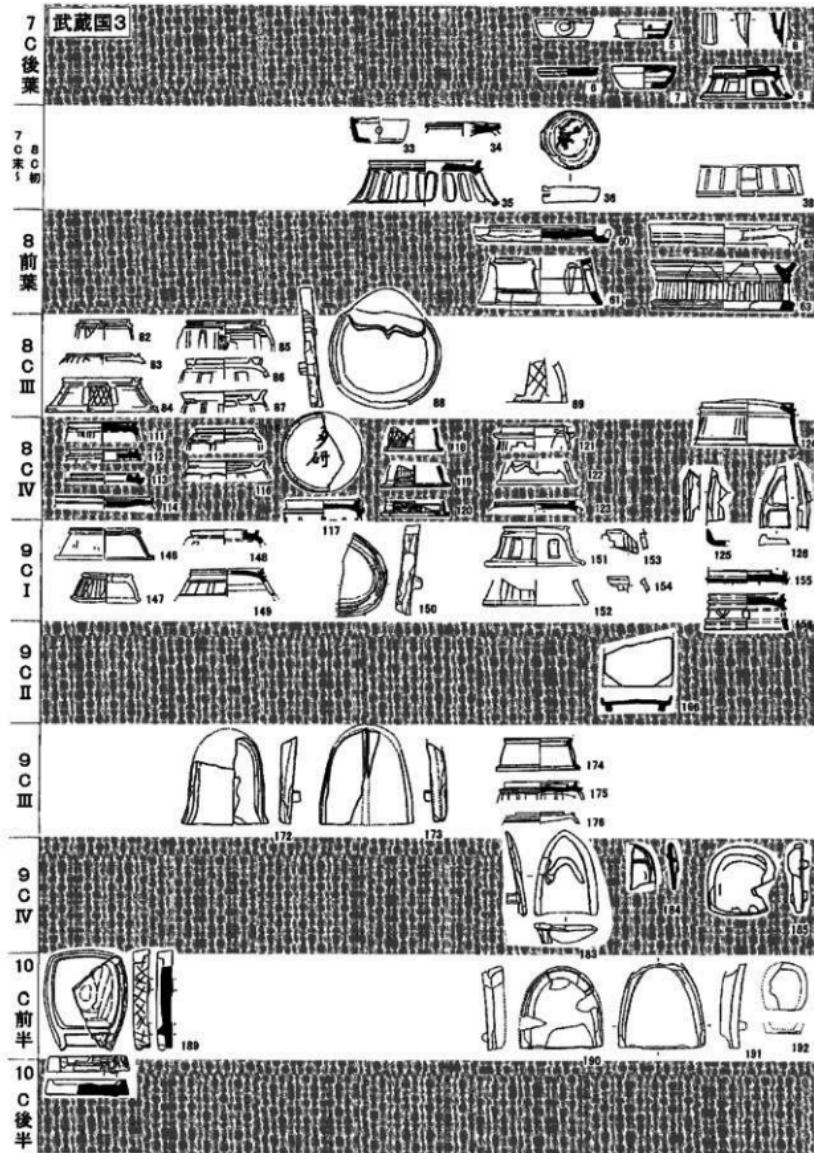
このほか、いわゆる初期国府（總領所）にかかる



第3図 武藏国の陶器 1



第4図 武藏国の陶器 2



第5図 武藏国の陶器 3

って、上野国府の群馬県前橋市元総社寺田遺跡、同市元総社西川遺跡、武藏国府の東京都府中市武藏国府関連遺跡などに陶硯がみられる。とくに西川遺跡からは、蹄脚硯が出土しており、都の官人がもたらした陶硯と考えられる。

また、郡家の出先機関からの出土として、多摩ニュータウンNo.446遺跡、深谷市東川端遺跡、船橋市印内台遺跡などがある。とくに東川端遺跡と印内台遺跡には、愛知県名古屋市猿投窯の陶硯がもたらされている。

陶硯の出土が少ないとはいっても、7世紀後葉からすれば、格段の出土量である。官人組織や官衙建物の整備と、決して無関係ではないと考えたい。

**8世紀前葉** 郡家遺跡では、群馬県太田市境ヶ谷戸遺跡（上野国新田郡家関連）、埼玉県深谷市熊野遺跡（武藏国桜沢郡家）、東京都北区西ヶ原遺跡、御殿前遺跡（武藏国豊島郡家）、神奈川県下寺尾西方A遺跡（相模国高座郡家）、栃木県真岡市中村遺跡（下野国芳賀郡家）、同県小川町那須官衙遺跡（下野国那須郡家）などから陶硯の報告がある。

継続的な出土は、曹司が調査され熊野遺跡だけある。この時期、国府が各地で産声を上げ、いわゆる国府関連遺跡から陶硯が出土する。とくに上野国府が最も多い。群馬県前橋市總社西川遺跡や同市中島遺跡、高崎市国府南部遺跡などにみられ、国衙工房の同市鳥羽遺跡では4点の出土がある。上野国分寺僧寺・尼寺中間地域からも陶硯の出土がみられる。

また、上野国府や群馬郡家の官人とかかわる前橋市大屋敷遺跡からも大形の円面硯が出土した。武藏国府では、東京都府中市武藏国府関連遺跡で大形の円面硯がみられる。しかし、数は少ない。武藏国府と歩調を合わせ発展した日野市落川遺跡、一の宮遺跡でもこの段階から出土がみられる。

常陸国府では、国衙工房の茨城県石岡市鹿の子C

遺跡、茨城郡家とかかわる同市茨城廃寺から出土がみられる。同遺跡とも水戸市木下葉窯から供給を受けた製品である。

このほか、下野国府でも陶硯が用いられ始まる。しかし、相模、上総、下総、安房国府では、陶硯の出土がみられない。そればかりか、この四カ国は、その後も陶硯の需要は、極端に少ない。須恵器窯が、積極的に展開しなかったことと、大きくかかわると考えたい。

**8世紀第Ⅲ四半期** 郡家の出土は、極端に減る。桜沢郡家にかかる埼玉県熊野遺跡や深谷市岡部条里遺跡では、前代から継続して確認できる。しかし、この段階をもって消滅する。下総国埴生郡家の厨家である千葉県栄町向台遺跡では、5点の円面硯が出土した。

一般的に郡家遺跡は、このころを境に政府が弱体化していく。唯一、茨城県つくば市中原遺跡のみ、9世紀第Ⅳ四半期まで円面硯の出土が続く。中原遺跡は、常陸国河内郡家の西側に営まれた集落遺跡であり、郡家の成長とともに展開した遺跡である。郡家の関連集落としては、郡家の衰退後も大形の建物群が建てられ続けた稀な例である。

一般に9世紀に入ると、郡家遺跡は衰退するが、郡家の文書事務は、減少したわけではない。陶硯の消費量が極端に減少するのは、やはり陶硯が、実用ばかりではなく、官人の象徴として重視されていたからである。

その反面、国府では、上野国府や武藏国府、下野国府などで10世紀後半まで継続的に確認できる。上野国府では、9世紀第Ⅳ四半期まで円面硯と風字硯が並存していたが、10世紀入ると風字硯のみとなる（註6）。

なかでも前橋市大屋敷遺跡では、外堤の下に珠文を貼付した円面硯が出土しており、蹄脚硯の退化し

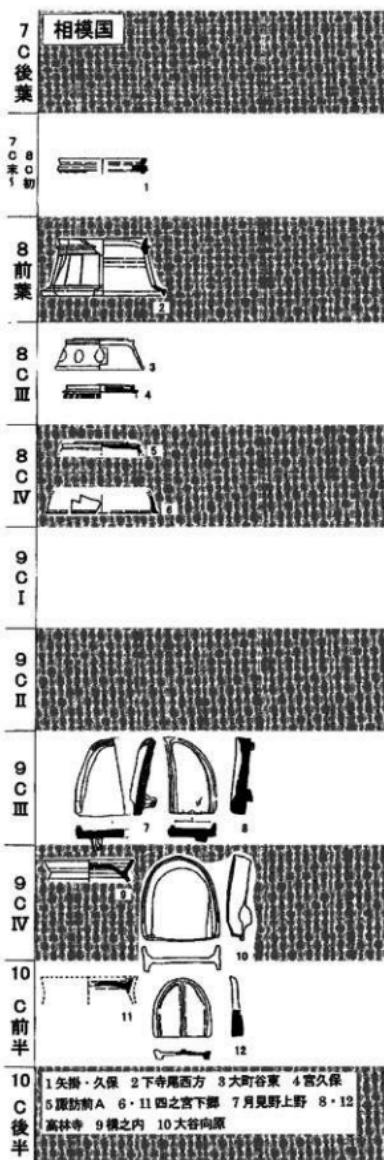
た形態とも考えられるが、同種の円面硯が、山梨県韮崎市宮ノ前遺跡や静岡県藤枝市御子ヶ谷遺跡などから出土しており、静岡県からの搬入品と考えておきたい。また、中島遺跡の風字硯は、丁寧に磨き上げられた黒色土器であり、平安京からもたらされた風字硯である（註7）。

武藏国府では、9世紀第IV四半期まで円面硯を確認できる。8世紀第IV四半期から10世紀前半にかけては、風字硯がみられ両者が並存する。また、下野国府では、10世紀後半まで円面硯を確認できるが、風字硯は確認できない。なお、両国府とも8世紀第IV四半期から9世紀前半の陶硯が最も多い。

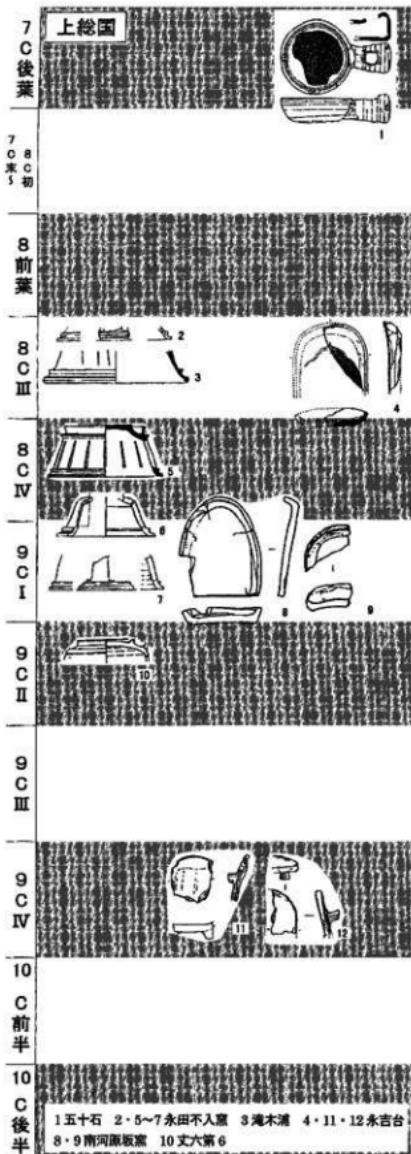
相模国府の平塚市諫訪前遺跡周辺では、8世紀第IV四半期から10世紀前半まで陶硯の出土がみられる。円面硯と風字硯が並存するのは、武藏国府と共に通するが極端に少ない。また、常陸国の国衙工房である茨城県石岡市鹿の子C遺跡では、陶硯の出土が8世紀第IV四半期を境に停止する。国府外に営まれた国衙工房だったため、その使命を終えたことで、陶硯も受容されなくなったのであろう。

その反面、上野国の国衙工房であった群馬県鳥羽遺跡は、国府内に営まれた工房であったため、9世紀以降も10世紀後半まで陶硯の出土は続いた。国府といつても、明確な官舍群や実務官衙群からの出土ではない。それらを取り囲む膨大な数の堅穴住居群から、わずかな数の陶硯が出土した。

なお、写経や文字を書く機会の多い寺院跡ではあるが、陶硯が出土することは少ない。わずかに茨城県水戸市台渡里廃寺（8世紀後半）、埼玉県日高市高岡廃寺、茨城県石岡市茨城廃寺、栃木県栃木市下野国分寺跡、東京都国分寺市武藏国分寺跡などから、8世紀代の円面硯が出土しているに過ぎない。ただし、下野国分寺跡からは、愛知県名古屋市猿投窯で作られた風字硯が出土した。



第6図 相模国の陶硯



第7図 上総国の陶硯

### 3. 集落の陶硯

集落と官衙を遺跡の上で分けることは難しいが、ここでは郡家、寺院、国府以外の遺跡から出土した陶硯についてみておきたい。

7世紀末から8世紀初頭 確実に集落遺跡から陶硯が出土するのは、7世紀末から8世紀初めに入つてからである。

上野国では、群馬県松井田町松井田工業団地遺跡、同町人見中の條遺跡、高崎市三ツ寺II遺跡、同市音谷石塚遺跡。武藏国では、埼玉県本庄市将監塚・古井戸遺跡、熊谷市北島遺跡、坂戸市稻荷前遺跡、東京都国立市仮屋上遺跡、北区下十条遺跡、日野市落川遺跡、川崎市宮添遺跡。相模国では、神奈川県相模原市矢掛久保遺跡。下野国では、栃木県佐野市馬門南遺跡、芳賀町免の内台遺跡などの遺跡からそれぞれ出土している。

将監塚・古井戸遺跡、北島遺跡、稻荷前遺跡は、豪族居宅を中心に郡内の拠点的集落として展開した遺跡である。また、松井田工業団地遺跡、三ツ寺II遺跡、音谷石塚、馬門南遺跡は、東山道や郡傳路と近い集落であり、駅家や郡傳とかかわって展開した集落である。

さらに仮屋上遺跡、下十条遺跡、宮添遺跡、免の内台遺跡などは、一般的な集落遺跡であり、こうした集落の中に郡家とかかわりのある人物がいたのかかもしれない（註8）。

上野、武藏、下野国は、他の国々に先行して一般集落でも陶硯を用いていた。しかし、広く一般集落に陶硯が行きわたったのではなく、郡家や駅家などの官衙や豪族居宅、ごく一部の集落に留まっていたのである。おそらく陶硯を出土した集落には、官衙事務の一部を補完し、雜任として官衙に使えた者があつたかもしれない。

ところで、陶硯の需要が、①郡家や寺院、②豪族

の居宅、③集落というように三層構造で確認できるのは、三カ国どの郡でも見られるわけではない。上野国では群馬、碓氷郡、武藏国では児玉、榛沢、入間、荏原、橘樹、多摩郡、下野国では芳賀、阿蘇郡に限られる。つまり、政庁や正倉などの郡家建物は、どの郡でも確認されるだろうが、陶硯は、郡や地域によって需要が不均衡であったのである。

**8世紀前葉** 8世紀前葉になると、集落遺跡から陶硯の出土は増加する。上野国では、群馬県渋川市御幸田畠中遺跡、同市半田中原遺跡、前橋市天之宮洗橋遺跡、同市西田遺跡、吉井町長根羽田村倉遺跡、藤岡市寺前遺跡、玉村町五料平遺跡、高崎市保渡田東遺跡である。

また、武藏国では、埼玉県行田市築道下遺跡、坂戸市若葉台遺跡、同市稻荷前遺跡、深谷市上敷免遺跡、川越市天王遺跡、東京都あきる野市瀬戸岡新道遺跡、神奈川県川崎市岡上4遺跡である。

さらに、下総国は千葉県成田市大袋小谷津遺跡、常陸国は茨城県つくば市熊の山遺跡、同市柴崎遺跡、同市上野陣場遺跡、下野国は芳賀町免の内台遺跡、足利市熊野遺跡、国分寺町薬師寺東遺跡、佐野市館の前遺跡、宇都宮市上芝遺跡、国分寺町多功南原遺跡などが確認できる。

これらの中には、古代交通路や官衙にかかわり展開した遺跡や、地域開発の拠点となった遺跡がある。たとえば、築道下遺跡は、元荒川の川津、川越市天王遺跡は、郡家の周辺集落、若葉台遺跡は、東山道「入間路」の西に展開した集落、薬師寺東遺跡は、下野薬師寺を支えた集落などである。

なかでも地域開発の拠点として大きく展開した稻荷前遺跡は、若葉台遺跡と併行して南北企窓で生産された陶硯を9世紀第1四半期まで用い続けた。熊の山遺跡は、常陸国河内郡島名郷の拠点的集落として成長した遺跡であり、ここも9世紀第1四半期ま

で陶硯を継続的に確認できる。ほかに同種の遺跡は、北島遺跡、大袋小谷津遺跡、二之宮洗橋遺跡などがある。

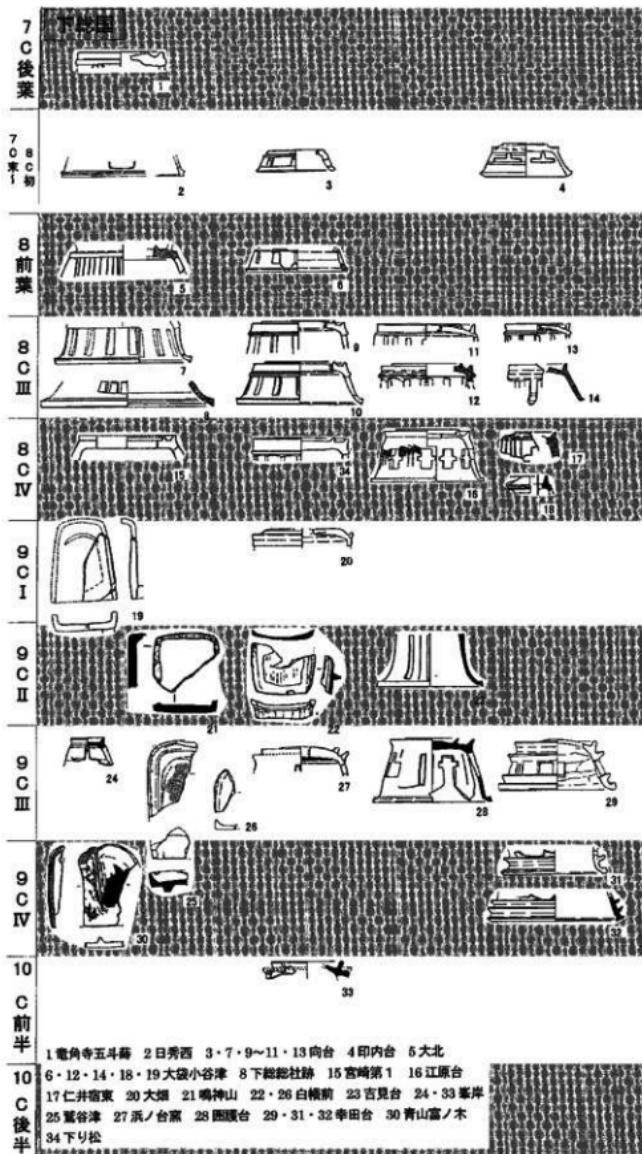
しかし、陶硯を継続的に消費した集落は稀である。これらの遺跡は、陶硯に象徴される文書事務にかかわる者が、累世的に存在したか、文書事務が継続的に行われた特殊な遺跡といえよう。

また、地域の拠点的な遺跡でも、陶硯が継続して出土しない遺跡もある。御幸田畠中遺跡や半田中原遺跡、保渡田東遺跡、長根羽田倉遺跡、寺前遺跡、五料平遺跡、岡上4遺跡、館の前遺跡、上芝遺跡、多功南原遺跡などである。

**8世紀前葉** 陶硯が各地の集落で用いられたが、どこでも用いられたのではない。その集落の地域の中で果たした役割によって、陶硯の需要も異なっていたのである。

**8世紀第Ⅲ四半期** 陶硯の使用が継続して確認できる集落のほか、上野国では群馬県玉村町上之手石塚遺跡、松井田町愛宕山遺跡、伊勢崎市下測名高田遺跡、藤岡市株木遺跡、月夜野町後田遺跡、高崎市熊野堂遺跡、武藏国では埼玉県川越市花見堂遺跡、飯能市張摩久保遺跡、東京都日野市神明上遺跡、八王子市多摩ニュータウンNo.107遺跡、相模国は横須賀市大町谷東遺跡、海老名市宮久保遺跡、上総国は東金市淹木浦遺跡、袖ヶ浦市永吉台遺跡、常陸国は、水戸市大塚新地遺跡、同市梶内遺跡、北浦町木工台遺跡などの集落で陶硯を確認できる。

なかでも梶内遺跡や後田遺跡、永吉台遺跡は、この後、10世紀前半まで陶硯の使用が確認できる。梶内遺跡は、「舍人」や「舍人子」の墨書き器などから、「半津駅」の駅務にかかわり成長した集落とされる。なお、86号住居跡から出土した高脚の円面硯は、陸奥国北上川流域の城橋出土の円面硯と共に通する。



第8図 下総国の陶器

8世紀後半期 上野国では、群馬県高崎市上流、櫻町遺跡、前橋市荒砥上ノ坊遺跡、前橋市芳賀東部団地遺跡、吉井町黒熊八幡遺跡、藤岡市株木B遺跡、太田市鳥山下遺跡、沼田市大釜遺跡、渋川市諏訪の木遺跡、富岡市本宿郷土遺跡などに確認できる。

また武藏国では、埼玉県滑川町天裏遺跡、東松山市西浦遺跡、狭山市今宿遺跡、同市小山ノ上遺跡、東京都板橋区四葉地区遺跡、神奈川県横浜市谷地川流域No.7遺跡などである。

下総国では、千葉市宮崎第1遺跡、佐倉市江原台遺跡、結城市下り松遺跡、佐原市仁井宿東遺跡である。

常陸国では、ひたちなか市武田石

高遺跡、下野国では小山市金山遺跡などに陶硯の出土がみられる。

なかでも西浦遺跡は、比企郡家や都幾川の川津とかかわる遺跡であり、この後、9世紀前半まで陶硯の出土が続く。また出土量も多い。黒熊八幡遺跡や小山ノ上遺跡も9世紀第Ⅱ四半期まで陶硯の出土が確認できる。

大規模集落以外にも天裏遺跡、谷地川流域No.7遺跡、宮崎第1遺跡、仁井宿東遺跡などの小規模な遺跡は、山野の開発に伴って丘陵地帯に進出した集落である。そうした集落でも陶硯の使用が確認できる。郡家の出土が低下し、国府の出土が上昇する中で、集落出土の陶硯も上昇する。

ところで、陶硯の大きさは、7世紀末から8世紀初頭のころから大小の二極化が始まる。集落出土の陶硯は、次第に小型製品となる。なお、国府では、大型品と小型品の両者が用いられた。

9世紀第Ⅰ四半期 9世紀に入ると、その傾向はさらに顕著となる。しかし、集落出土の陶硯は、相対的に減少する。上野国では、群馬県安中市人見中の條遺跡、太田市東長岡戸口遺跡、荒砥上ノ坊遺跡、武藏国では、埼玉県深谷市北坂遺跡、熊谷市岩井田遺跡、青梅市霞台遺跡、和光市漆台遺跡、所沢市東の上遺跡などである。

逆に常陸国では、集落遺跡の数が増加した。茨城県ひたちなか市皿沼遺跡、同市大峯遺跡、土浦市長峰遺跡、同市念代遺跡、同市八幡下遺跡、新治村田宮遺跡、下野国では、益子市星の宮ケカチ遺跡、高根沢町砂部遺跡、小山市溜の台遺跡などから出土がみられる。

とくに星の宮ケカチ遺跡、砂部遺跡は、その後も9世紀第Ⅱ四半期まで複数の陶硯の出土が続く。両遺跡とも下野国府の円面硯と共に圓面硯が用いられていた。

武藏国では、南比企窯の操業が急速に冷え込み、かわって末野窯や東金子窯、南多摩窯などで操業が活発となり、これらの須恵器を消費する地域で陶硯がみられるようになる。

この傾向は、上野国の秋間窯から吉井町藤岡・吉井窯、太田市金山窯へ、常陸国の中木下葉窯から新治窯や下野国益子窯へという変化を指摘できる。

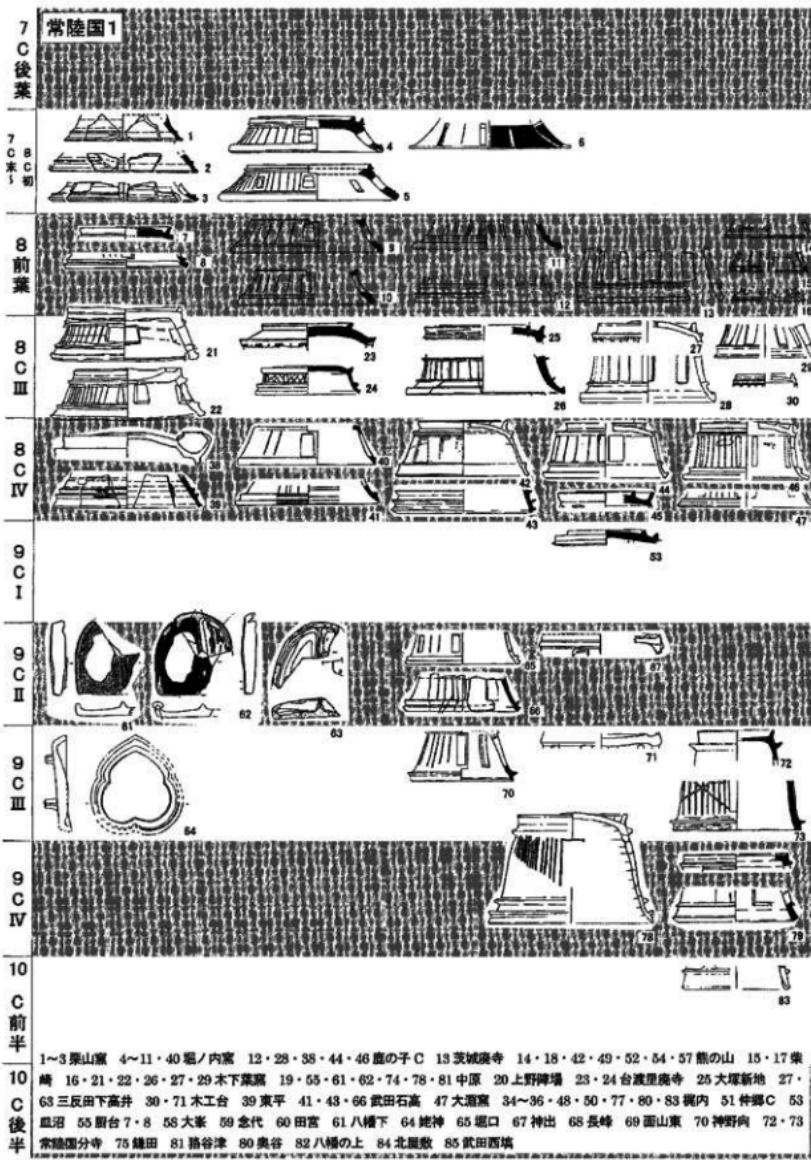
9世紀第Ⅱ四半期 陶硯の出土がみられるのは、上野国では、群馬県前橋市芳賀東部団地、同市荒砥上ノ坊遺跡、吉井町黒熊八幡遺跡、武藏国では、東京都多摩市東寺方遺跡、八王子市多摩ニュータウンNo.107遺跡、下総国では、茨城県結城市峯崎遺跡、千葉県印西市鳴神山遺跡、八千代市白幡前遺跡、佐倉市吉見台遺跡、上総国では、千葉県千葉市丈六遺跡、常陸国では、ひたちなか市三反田下高井遺跡、同市堀口遺跡、土浦市神出遺跡、同市長峰遺跡、茨城町面山東遺跡、下野国では、宇都宮市辻ノ内遺跡、二宮町西物井遺跡などである。

関東全体の出土陶硯の数は、減少することがない。武藏国で大幅に減少し、上総、下総、常陸、下野国で上昇するからである。しかし、確実に減少傾向にあり、前段階から陶硯を用い続けた遺跡も、この段階が最後となる。

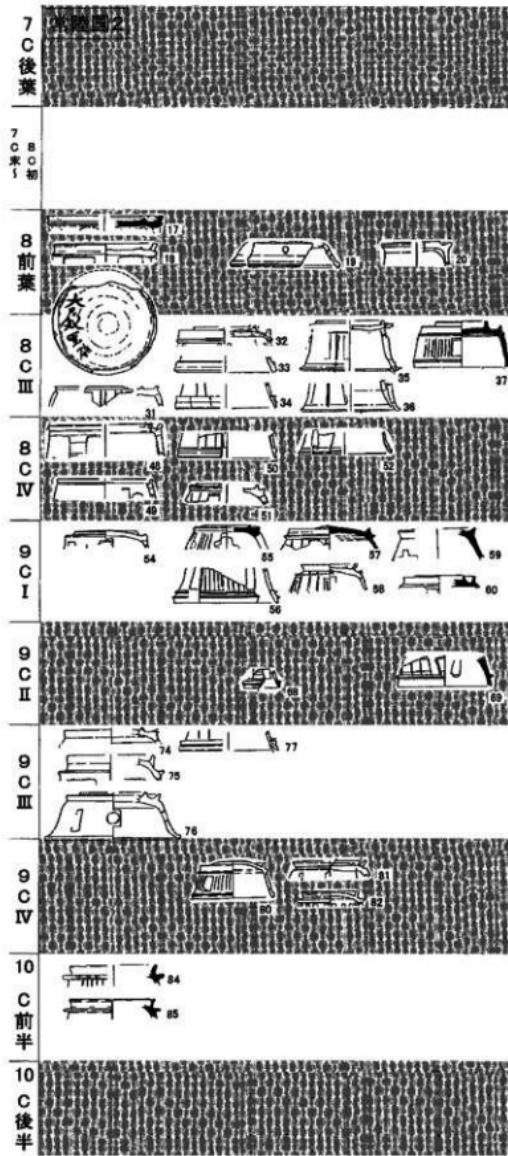
風字硯は、8世紀中葉から平城京の官衙や貴族邸宅で用いられ、関東地方の国府では、8世紀第、四半期から使用が一般化し、集落遺跡でも9世紀第Ⅱ四半期以降みられるようになる。

風字硯が出土したもっと早い集落遺跡の例は、群馬県渋川市諏訪の木遺跡の8世紀第Ⅳ四半期である。続いて千葉県成田市大袋小谷津遺跡（9世紀第Ⅰ四半期）、9世紀第Ⅱ四半期には、黒熊八幡遺跡、荒砥上ノ坊遺跡、鳴神山遺跡、白幡前遺跡、三反田下高井遺跡などと数が増える（註9）。

9世紀第Ⅲ四半期 前代の傾向は、そのまま続



第9図 常陸國の陶器 1



第10図 常陸国の陶器 2

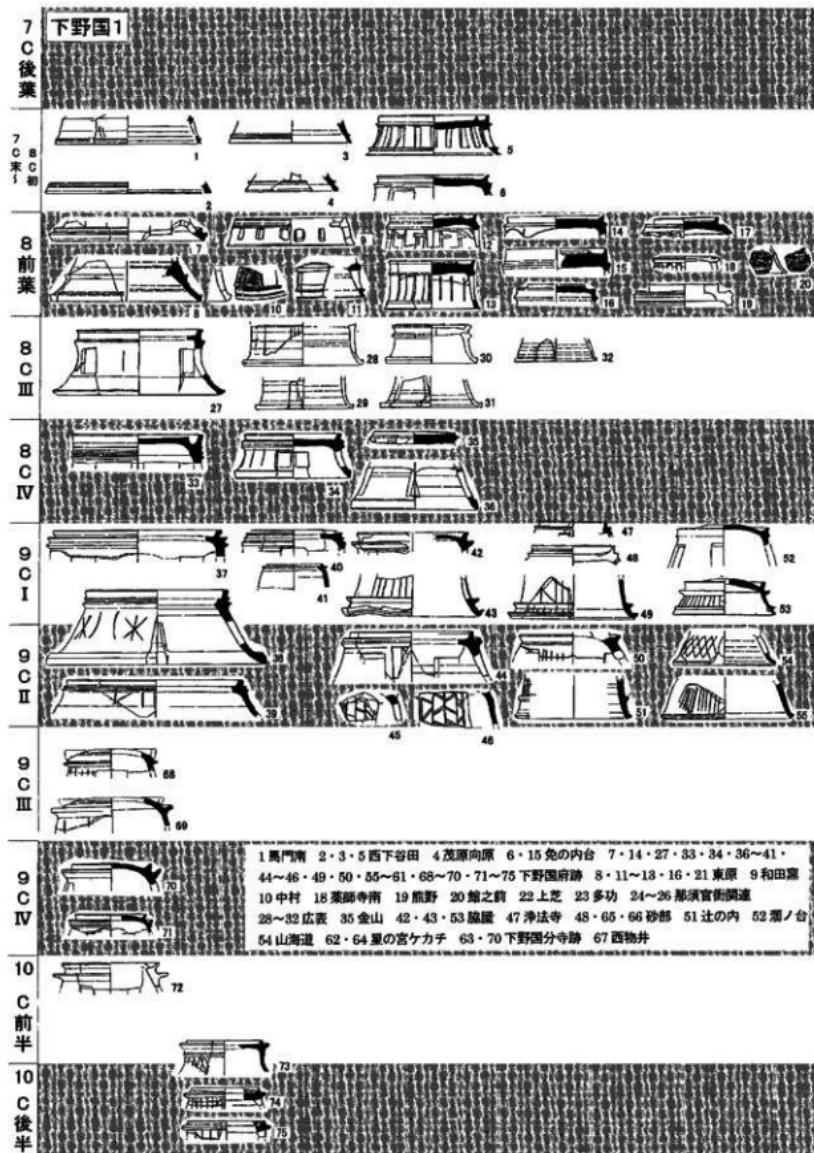
く。上野国では、群馬県富岡市上田篠遺跡、太田市東長岡戸井口遺跡、同市中屋敷遺跡、玉村町上之手石塚遺跡、高崎市日高遺跡、月夜野町洞遺跡、沼田市後田遺跡、吉井町黒熊中西遺跡、渋川市有馬条里遺跡、吉井町白倉下原遺跡などの各集落遺跡で陶器を確認することができる。

武藏国では、埼玉県寄居町沼下遺跡、東京都調布市深大寺池の上遺跡、相模国では、神奈川県大和市月見野上野遺跡、下総国では、八千代市白幡前遺跡、千葉市鷺谷津遺跡、成田市開護台遺跡、茨城県東村幸田台遺跡、常陸国では、牛久市姥神遺跡、北浦町木工台遺跡、伊奈町鎌田遺跡などである。風字観が、全体の半数となる。

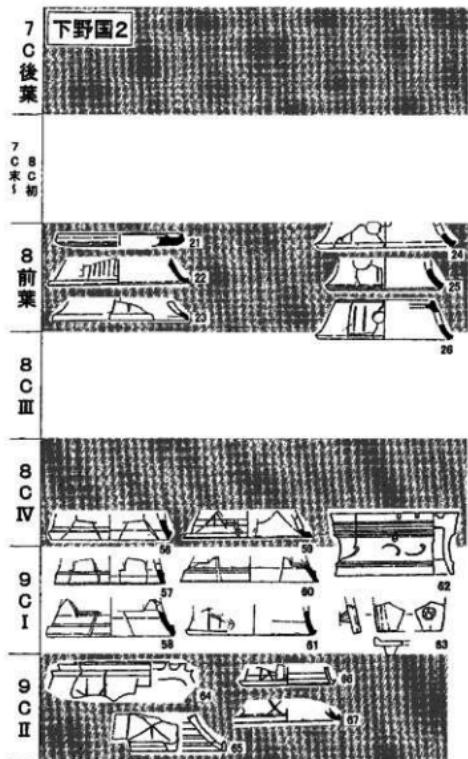
9世紀第IV四半期 さらに陶器の出土する集落遺跡は減少する。上野国では、群馬県吉井町黒熊八幡遺跡、同町多胡蛇黒遺跡で円面観、太田市揚原遺跡、玉村町上之手石塚遺跡、渋川市南中道遺跡、同市別分八幡下遺跡、伊勢崎市上植木光仙坊遺跡などで風字観がみられた。

武藏国では、東京都昭島市経塚下遺跡、八王子市多摩ニュータウンNo.847遺跡、相模国では、神奈川県大谷向原遺跡、上総国では、袖ヶ浦市永吉台遺跡、下総国では、青山富ノ木遺跡などすべて風字観である。

また、常陸国では、茨城県水戸市桝内遺跡、ひたちなか市猪谷津遺跡、茨城町奥谷遺跡、つくば市中原遺跡、土



第11図 下野国の陶侃1



第12図 下野国の陶硯 2

浦市八幡上遺跡などがあり、すべて円面硯である。

風字硯と円面硯という嗜好の差は、地域によって大きく異なっていたと考えたい。とくに武藏、相模、上総国は、風字硯の嗜好が強い。

10世紀 陶硯の出土が著しく低下する。上野国では、群馬県玉村町船荷山遺跡、吉井町多比良遺跡、前橋市中島遺跡などの陶硯があり、船荷山遺跡を除いて風字硯である。また、中島遺跡の風字硯は、丁寧に磨かれた黒色土器であり、畿内(平安京)からの搬入品と考えられる。

武藏国は、東京都八王子市多摩ニュータウンNo.271・452遺跡、埼玉県上里町中堀遺跡、ふじみ野市北別所遺跡などで風字硯がみられるだけである。この段階をもって、武藏国の集落から陶硯がみられなくなる。

一方、下総国では、茨城県東村幸田台遺跡、結城市峯崎遺跡、常陸国では、水戸市北屋敷遺跡、同市梶内遺跡、ひたちなか市武田西塙遺跡で円面硯が用いられた。下総・常陸国の集落は、最後まで円面硯にこだわったのである。

10世紀後半の集落で陶硯が出土するのは、いよいよ上野国のみとなる。群馬県松井田町松井田工業団地遺跡、吉井町川内遺跡、月夜野町洞、遺跡などで風字硯が用いられた。これを最後として、関東地方から陶硯は姿を消す。

### まとめ

陶硯は、文字や絵画を筆で書くために墨をする道具である。奈良・平安時代、文字や絵画を書いたのは、官人か僧侶。官人か僧侶がいるのは、役所か寺。だか

ら陶硯が出土すれば、その遺跡は役所か寺という論理で単純に考えられてきた。

しかし、①陶硯は、墨をするだけの道具か。②文字を書いたのは、官人か僧侶だけか。③陶硯を用いたのは、役所か寺だけか。陶硯の本質を考えると、さまざまな疑問がわく。

その答えは、①については、陶硯の使用痕跡の分析、②については、古文書や木簡、墨書き土器の研究成果との比較、③については、出土遺跡の本質的性格を検討することが必要となる。

そこで、まず①使用痕跡の分析では、陶硯の硯面について研磨状況の確認が課題となる。今回、取り上げた関東地方の陶硯すべてを確認したわけではないが、大半の陶硯は、硯面がざらつき、光沢がなかった。地中で表面が劣化した可能性もある。また、墨の痕跡も乏しかった。

硯は、「研」とも表記され、墨は、表面を平滑に研がれた石や陶器の上で磨られた。須恵器窯から窯出しされ、墨を磨るまでに平滑に研がれたはずである。しかし、窯元で研いだのか、陶硯の使用者が研いだのか、判断は分かれる。集落から出土した陶硯の大半が、表面の研磨が行われないことから、陶硯は、実用品であるとともにその象徴性を高く評価する必要があると考えたい。

その一方で、須恵器の食器や壺の破片を用いた転用硯（いわゆる坏蓋硯を含む）が、実用的硯として多数発見され、墨をするときは、これらが積極的に用いられていた。

つぎに②の文字を書いた人、いわゆる識字層の問題である。かつては、墨書き土器の出土から識字率を考える論考があった。たとえ同一の人名でも別人の筆跡であることや、共通する名前が他の遺跡から出土することなどから、現在では、集落の識字率の研究対象として墨書き土器を用いることは少ない。

一方、地方官衙の出先機関や多様な地域支配拠点の研究が進展したことでの郡家や寺院以外にも、地方行政を支えた末端官人がいたことや、村落内に存在する宗教的施設などが明らかになってきた。

このことに伴い、郡司や僧侶以外に文字にかかわる人物、たとえば郡雜任などが、行政文書を書く場合もあったろうし、村の有力者が、出舉などで文字を書いた場合も考えられる。その場合、陶硯を用いたか、転用硯を用いたかは判断できない。

最後に③の陶硯を用いた場所は、陶硯出土遺跡の

地域における役割を追求することである。本稿では、この点に重点をおいた。陶硯を出土する生産遺跡、使用した郡家や寺院、そして集落遺跡に分類し、生産や消費の変遷過程を国ごとに記述した。

ここで明らかになったことは、

①地方官衙の拠点である郡（評）家の登場する以前に、陶硯は地方で生産され、一部の遺跡で用いられていた。郡（評）家の建設に先立ち、郡司や評造たちが、文書行政をこなしていたこと、あるいは官人の象徴として、陶硯が必要品だったからである。

②どの郡でも郡家建物群が建てられると、陶硯の需要は急速に増す。しかし国や地域によって、陶硯の必要度は異なっていた。上野、武藏は高く、常陸、下野が続き、相模、上総、下総などはとても低かった。

また、同一国内でも上野国では、東毛や北毛はやや低く、下野国では那須地域が高い。これは、須恵器窯の操業地域と雑器の流通圏とのかかわりを考慮すべきであろう。

③郡家や寺院から陶硯が出土することは、意外にも稀である。郡家の正倉や政庁、寺院の七堂などは、本来、常に淨められていたため、出土遺物に乏しく、陶硯も出土をみないと考えたい。しかし、いわゆる曹司とされる区域や、官衙や寺院に隣接した集落からの出土はとても多い。

④郡家や寺院では、大形の円面硯や畿内・東海地方の陶硯がしばしば出土する。国司の部内巡回や郡司の都鄙往反によって獲得されたと考えられる。武藏国榛沢郡家（熊野遺跡）の脚硯や下野国那須郡（那須官衙遺跡）の狼投窯でつくられた陶硯がこの事情を物語る。

⑤国府関連遺跡では、いわゆる国衙建物群の成立以前から、他地域に比較して陶硯の出土が多い。とくに上野、武藏国府は顕著である。

⑥集落遺跡の陶硯は、8世紀前葉からみられる。とくに9世紀に入ると郡家からの出土は消える。集落から出土する陶硯は、比較的小型品が多い。集落で陶硯の保有が増す9世紀に、陶硯の小型化が進んだからである。国府、郡家、集落というヒエラルキーは、陶硯の大きさに反映されなかったと考えたい。

文字を書くための道具として生産された陶硯ではあるが、陶硯は、文字を書く者の象徴として集落の中にさまざまな形で埋没していた。関東地方の出土事例は、このことを改めて認識させてくれることになった。

なお、関東地方や北陸地方から出土した陶硯の型

## 註

- (1) 五斗荷窯の陶硯は、灰原からの出土であり、竜角寺の瓦とのかかわりは難しい。
- (2) 正倉院に残る「青斑石莊硯」は、陶製の風字硯を蛇紋岩の枠で六角形に囲った硯である。建久4年(1193)の「東大寺勅封藏開檢目録」によると、天平勝宝5年(754)に検納された権の中に「納木筆二管 大色紙二合 黒二廷 研一基 会前加納墨五廷 水精玉四果 眉間分」が認められていたとある。「研一基」が、この風字硯に当たるという。
- (3) 千葉県袖ヶ浦市永吉台遺跡や宮城県多賀城跡などに類例がある。
- (4) 熊野遺跡や堤上遺跡、五十石遺跡などは、豪族の居宅や派遣官人の館、あるいは集落にかかわり、陶硯が用いられたと考えたい。
- (5) 陶硯の出土がみられない郡家遺跡は、正倉や政厅城の調査のため出土遺物が希薄なこととかかわるかもしれない。
- (6) 上野国府にかかる遺跡は、前橋市大屋敷遺跡、同市元總社明神遺跡、同市上野国府跡、同市鳥羽遺跡、同市元總社寺田遺跡、同市小見内I遺跡、同市總社西川遺跡、同市中島遺跡、同市上野国分寺僧寺・尼寺中間地城、高崎市北原Ⅱ遺跡、同市西園分Ⅱ遺跡などである。
- (7) 同種の風字硯を山梨県甲府市大原遺跡で確認した。
- (8) 矢掛保遺跡は、相模国高座郡内の遺跡となるが、東京都八王子市小山窯の近くに展開した集落遺跡である。武藏国とのかかわりが強く、相模国が、早い段階から陶硯を用いていたことはならない。
- (9) 相模、上総、下総、常陸国では、風字硯の出土が乏しく、下野国はこの段階以降、集落遺跡からみられなくなる。
- (10) 豪族の居宅や郡家などの末端官衙、あるいは庄園なども含まれている。これらの集落でも陶硯が用いられていた。

## 参考文献

### 〔陶硯集成〕

- 市毛美津子 1988 「水戸市内出土の陶硯について」『水戸市立博物館報』3 水戸市立博物館  
井上義安 1990 「円面硯について」『茨城町大峯遺跡』 茨城町大峯遺跡発掘調査会  
猪俣喜彦 1993 「山梨県における出土硯をめぐる現状と課題」『山梨県考古学協会誌』

式的な検討については、別稿すでに述べている。今後、脚部文様の展開と地域性、東北地方や東海・中部地方との関係、さらには陶硯を通じた官人社会と律令国家などについて、稿を改め検討を試ることを約束したい。

本稿は、平成17年度(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団研究助成(A)「古代の陶硯と地方の文書行政」の成果の一部である。

また、本文中に用いた挿図は、茨城県考古学協会シンポジウム「古代官衙周辺における集落の様相」で、「東国の地方官衙・集落と陶硯」として行った発表レジュメを採録した。

- 大竹憲治 1976 「福島県の陶硯及び獸脚について」『史峰』9 新進考古学同好会
- 大竹憲治 1979 「再び福島県出土の古代陶硯を論ず」『平地学同好会会報』
- 小潤良樹 1983 「円面硯について」『岩比田』 岩比田遺跡調査会
- 川井正一 1992 「内原町藏田千軒遺跡出土の陶硯について」『内原町史研究』創刊号
- 坂本和也 1993 「福島県の円面硯集成」『陣場沢窯跡群試掘調査報告書』 双葉町教育委員会
- 高橋 敏 1997 「山形県内出土円面硯について」『西町田下遺跡発掘調査報告書』(財)山形県埋蔵文化財センター
- 竹花宏之 1984 「武藏国における陶硯について」『入間市八坂前窯跡』 八坂前窯跡調査会
- 丸杉俊一郎 1989 「官衛関連遺物の集成」『静岡県の窯業遺跡』 静岡県教育委員会
- 山中敏史 1983 「陶硯関係文献目録」『埋蔵文化財ニュース』41 奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター
- 綿貫邦夫 1988 「陶硯について」『書上下吉祥寺遺跡・書上上原之城遺跡・上植木志町田遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 綿貫邦夫 1996 「群馬県出土陶硯の集成及び若干の分類」『大屋敷遺跡』 前橋市埋蔵文化財発掘調査団
- 和深俊夫 1983 「四郎作遺跡出土の陶硯について」『四郎作遺跡』 いわき市教育委員会  
(論文)
- 生田和宏 2003 「城櫓官衙遺跡における陶硯の様相－多賀城を中心として－」『古代陶硯をめぐる諸問題』 独立行政法人奈良文化財研究所
- 石井則孝 1980 「日本古代文房具史の一側面－陶硯について－」『古代探叢』 滝口宏先生古稀記念論文集 早大出版会
- 石井則孝 1985 「陶硯」 ニュー・サイエンス社
- 一瀬和夫 1995 「墨書きのひろがり」『古代人名録－戸籍と計帳の世界－』 大阪府立近つ飛鳥博物館図録六
- 小田和利 2003 「地方官衙と陶硯－大宰府跡出土例を中心として－」『古代陶硯をめぐる諸問題』 独立行政法人奈良文化財研究所
- 北野博司 2004 「陶硯の使用実態を考える－多賀城政庁跡出土陶硯を中心に－」『第2回 東北文字資料研究会資料』
- 五島美術館 1978 「日本の陶硯」
- 杉本 宏 1987 「飛鳥時代初期の陶硯－宇治隼上り瓦窯跡出土陶硯を中心として－」『考古学雑誌』第七十卷四号 日本国考古学会
- 神野恵・川越後一 2003 「平城京出土の陶硯」『古代陶硯をめぐる諸問題』 独立行政法人奈良文化財研究所
- 田中広明 2004 「七世紀の陶硯と東國の地方官衙」『歴史評論』 歴史科学協議会
- 千田剛道 1995 「獸脚硯にみる百濟・新羅と日本」『文化財論叢』「奈良国立文化財研究所創設四十周年記念論文集」 同朋舎
- 内藤政恒 1944 「本邦古硯考」 善徳社
- 西口壽生 2003 「機内における陶硯の出現と普及－飛鳥藤原地域出土資料を中心として－」『古代陶硯をめぐる諸問題』 独立行政法人奈良文化財研究所
- 横崎彰一 1981 「日本古代の陶硯－とくに分類について－」『考古学論考』 小林行雄博士古稀記念論文集 平凡社
- 横田賛次郎 1983 「福岡県内出土の硯について－分類と編年に関する一考察－」『研究論集』九 九州歴史資料館
- 吉岡康暢 1983 「陶硯」「東大寺横江庄遺跡」 松任市教育委員会・石川考古学研究会
- 吉田恵二 1985 「日本古代陶硯の特質と系譜」『國學院大學考古学資料館紀要』第一輯
- 吉田恵二 1997 「暖硯考」『國學院大學考古学資料館紀要』第一三輯
- 吉田恵二 1992 「中国古代における円形硯の成立と展開」『國學院大學紀要』第三〇巻
- 吉田恵二 2003 「陶硯研究の現状と課題」『古代陶硯をめぐる諸問題』 独立行政法人奈良文化財研究所

研究紀要 第22号

2007

平成19年6月21日 印刷

平成19年6月28日 発行

発行 財團法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108 熊谷市船木台4-4-1

<http://www.saimai bun.or.jp>

電話 0493-39-3955

印刷 株式会社バスコ